
ドラゴンクエスト～勇者達の物語～

スイショウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンクエスト〜勇者達の物語〜

【Nコード】

N8664Y

【作者名】

スイシヨウ

【あらすじ】

依頼を終えて暇を持て余していた冒険者アウダー。彼の元に勇者を名乗る一行からとある依頼が舞い込んだ。怪物島と呼ばれるデルムリン島への案内を頼みたいというものだ。軽い気持ちで引き受けたこの依頼がアウダーの、彼の周囲の運命を大きく変えて行く。

arcadia様にて投稿している「勇者達の物語」の修正版です。arcadia様での投稿分は後日削除いたします。

プロローグ〈始まりの物語〉（前書き）

この物語は「ドラゴンクエスト ダイの大冒険」を原案として、作者のオリジナルキャラクター、独自解釈を加えて再構成しています。

そのため、ストーリー展開は原作に沿った部分もあれば、大幅に変化する部分もあります。

このために、「原作登場人物」の中には、設定・役回りが大幅に変化して登場するキャラクターもあります。

誤字脱字などありましたら、遠慮なくご指摘いただけると幸いです。

ご意見、ご感想もお待ちしております。

プロローグ―始まりの物語―

天界、魔界、そして地上界――

天地創造をなした神々は、次いで多くの種族を世界へと産み落とす。

人間、竜、魔族、そして多種多様な怪物達。モンスター

人間と竜と魔族は地上を治め、怪物達は種に応じてあらゆる場所で生息をしていた。

神々の庇護の元、大きな争いも無く平和に治められていた世界。しかし、長きにわたる平和も徐々に陰りを見せ始める。

生物として、他の種族とは比較にならない力と知識を持った竜の傲慢。

多種多様な能力と長い寿命、強大な魔力という力を持った魔族の野心。

最も脆弱であるが故に、知恵を、道具を、武具を、魔法を用い、求める事を続けてきた人間。

長い時は、この三種族の間に生まれた僅かな軋みを巨大な歪みへと変化させ――やがて地上は三種族の覇権をめぐる争いの中に。

「……それで、世界はどうなったの？」

「この争いを怒り悲しんだ神様にですね、竜は知を、魔族は光を、人間はそれまで蓄えていたモノ全てを取り上げられてしまったんですよ」

怖いですねえ。そう続けながら、男は幼い兄妹の目線に合わせるようにしゃがみ込んだ。

黒縁の眼鏡を外し、幼子を見つめる彼の眼差しは穏やかである。泣き止みはしたものの、未だぐずっている少女と、どこかばつの悪そうな様子でそっぽを向いている少年。

少女の左手は少年の服の裾を掴み、その右手にはリンゴが一つ。兄を見て、リンゴを見て。そうして少女はおずおずと手にしたリンゴを男へと差し出した。

「お互いがお互いを思いやり、分かち合い、理解し合おうとしていれば。きっと素敵な世界になっていたんでしょねえ」

男は懷からナイフを取り出すと、少女の手から渡されたそのリンゴを軽く放り上げ――

「ちょああああっ!」

奇声を上げた。

突如上がったその声に何事かと兄妹の気が逸れた一瞬の出来事であった。

「二人とも、手を出して下さい」

差し出された兄妹の掌にトトトツ、と何かが落ちて来る。それは綺麗に三つずつ六等分に切り揃えられたリンゴであった。

ただ等分しただけではなく、皮を耳に見立てたウサギ仕様である。男の技量と妙な凝り様がうかがえる。

「三つと三つ、半分個です」

わあつと表情をほころばせながら去って行く兄妹を、男は手を振り笑顔で見送った。

眼鏡を掛け直し、良い仕事をしましたねえ、と内心浸りながらしばらくそうやって眺めていると

「先生、アバンせんせ……い！ 船を出してもらえそうですよ……！」

「おおつ、それはナイスですねえ。グッジョブですよポップ」

その聞きなれた声に男——アバンが振り返る。大きく手を振りながらこちらへと駆け寄って来るのはトレードマークのバンダナを巻いた黒髪の少年——ポップの姿。

数少ないアバンの弟子の一人であり、未来の大魔法使いを自称している少年である。

もっとも、家出同然、事後承諾による押し駆け弟子でもあったが。

「ゼエゼエ……な、なんすスカ……、その、グッ、じょぶって……」

「グッドジョブ、つまりは良い仕事という事ですよ」

よほど急いでいたのかゼエゼエと荒い息をつく弟子の姿に、明日からの授業は体力向上をメインにしようと誓うアバン。

（とはいえ、まあ……無理でしょうねえ……）

訓練メニュー其の一で音を上げるポップの姿を想像し、その誓いを直ぐに撤回する。

同年代の少年達に比べてもポップの魔法使いとしての資質が十分にある事はアバン自身認めてはいる。

弟子となつて数カ月ではあるが、既に魔法使いとしての初級の呪文をほぼ全て修めている事がそれを証明していた。

しかし、どうにもこうにも根性が無いというか堪え性が無いというか注意力散漫というか。

その成長を褒めた事が災いしたのか、生来の性格的な面か、そこからなかなか次のステップへと進もうとはしない。

何かと理由を付けては厳しくなる修行を避けようとするのだ。

ガツンと厳しく当たればよいのであるうが、ポップ自身が魔法使いとして成長するという事にそこまで必死になっている訳でもなく、アバンにもポップを急いで成長させる様な理由は無い。

（結局は本人のやる気の問題ですしねえ）

「ハア……ハア……、と、とにかくですね、パプニカへの船は……出せる。……でも、もう直ぐに出港するって……ゼエ」

「とりあえずですね、深呼吸して落ち着きなさいポップ。船の件は分かりました。ああ、彼はどうすると言っていましたか？」

「……フウ……ハア……。ああ、あいつなら『パプニカには鬼がいるから寄りたくない』って言って口モス行きの船に乗っちゃいましたよ」

あいつとは、旅の道中で出会ったとある青年の事である。師であるアバンと意気投合したのか、一月ほどであったが共に旅をしていた人物である。

腕が立つのは認めるが男としてあいつを認めるわけにはいかない、乗り越えるべき壁だというのがポップの認識であった。

鼻の下が伸びている辺り、その燃やしている対抗心は口クな事ではなさそうであったが。

「ふむ。ならば私達も急ぎましょうか」

うへへへへと怪しく笑いだす弟子の姿をなるべく見ない様にして
そう言つと、アバンはポップの身体をひょいと小脇に抱えてみせ
る。

「はへ？」

「時間は有限ですからね。タイムイズマネー、急ぎますよ」

何を、とポップが抗議の声を上げる間もなく、アバンは凄まじい
速さで駆け出した。

「ちよちよちよ、せ、せんせ~~~~~っ!？」

砂塵を巻き上げて爆走するアバン。
ポップの抗議は右から左。

「ちよ、うわっ!？ あぶ、あぶ、あぶぶぶぶ!！」

砂塵によつて奪われた視界、時折り頬を掠める砂利や道行く人の
叫び声。

何より恐ろしいのは地面と水平になっている自分の身体に揺れや
振動を感じないという事。

「死ぬ死ぬ死ぬ死んでしま~~~~~ッ!！」

涙と鼻水を撒き散らすその姿を砂塵が覆い隠してくれていた事は、
ポップにとってある意味幸運であった。

「……何やってんだあの二人……」

棧橋からロモス行き船に乗り込もうとしていた件の青年は、目の前を駆け抜けた砂塵を呆れたように見つめていた。
ちなみにパプニカ行きの船が待つ棧橋を通り過ぎている。

「パプニカに行くんじゃないのか？ いや、気付いてないのか？」

伝えるべきかと思案しようとして――

「おい、兄ちゃんよ、乗るなら早く乗ってくれ！」

「ん？ ああ、悪い。直ぐに乗るよ」

船員の少しイラついた声に、まあいいかと二人の事は気にしない事にした。

「よしっ！ それじゃあ出港するぞー……！！」

地上界の中心に位置するギルドメイン大陸。

地上最大の大陸であるその地には、貿易大国であるベンガーナ王国、世界最強と称される騎士団を擁するカール王国、城砦王国と呼ばれるリンガイア王国など、世界有数の大国が存在している。

まさしく世界の中心たる大陸である。

そのギルドメイン大陸南端の半島に、アルキード王国という国が存在していた。

国力という点においては先の三国に劣るものの、他の諸外国と比較すれば、十分に大国と呼ばれるだけの力を持った国家である。

だが、それも全ては過去の話。

甲板に立った青年は、手すりにもたれかかりながらその視線をある方向へと向けた。

今、この世界にアルキードという名の国は存在していない。

時は十数年遡る。

魔王ハドラーと名乗った魔族が、闇の軍勢を率いて地上世界の征服を掲げて全世界に対し宣戦を布告。

地上界南東に位置するホルキア大陸に自らの居城である地底魔城を構え、宣戦と同時に地上侵攻作戦を開始した。

エルフやドワーフ、ホビットや土着の魔物など、聖邪善悪を問わず地上に生きる者全てを否応なく巻き込みながら、その戦火は加速度的に広がりを見せる。

『国境沿いの山村に魔王軍の襲撃あり』

各国がそうであるように、ここアルキード王国でも日に日に勢いを増す魔王軍への対応に追われ、城内は慢性的な人手不足に陥って

いた。

この日、兵からの報告を受けて対応に向かったのは既に一線を退き今では王の相談役として城に招かれていた老魔法使いブライ。

彼が動かせる僅かばかりの手勢を率いてようやくその場所へと到着した時、全ては焼け落ち灰と化した後であった。

「……生存者の存在は絶望的、か」

立ち上る煙、灰の中でくすぶる炎。直前まで村であった廃墟を眺めながらブライが苦々しくもそう呟いた時、ひどく慌てた様子の兵士から思わぬ報告が入る。

「ブライ様！ 子供です！ 民家の地下室から生き延びた子供が！」

「な、なんじゃと!？」

魔王軍との戦いの中、多くの人々が大切な何かを奪われていたこの時代。今また家族を、友人を、思い出の全てを奪われた存在が生まれ続けている。

兵士が連れてきたのは、灰に塗れた子供であった。まるで感情を失くしたかのように表情を固まらせた幼い少年。

「……立ち向かったのでしょうか。扉の前にその子の両親とかわい——」

「——言わずともよい。して、この少年の他には？」

絶望視していた生存者の存在は希望だ。ならば他にもと一縷の望みをかけて問うたブライであったが

「いえ……恐らくは……」

「そうか」

うつむき答える兵士の言葉に、老いた今の自分の無力さを痛感する。

平和の中、老いを受け入れ自らの力を高める事よりも政の道を選んだ。その事を間違っていたとは思わない。

思わないが、それでも、あるいはと。そう思ってしまうのは己の未熟故か。

「ままらなんものじゃな」

そう呟くと、ブライは無言のまま立ち尽くしている少年を見た。少年が何を思い故郷を、滅ばされた村を見つめているのかはブライにはわからない。

珍しい光景ではない。

少年の見つめる光景は珍しいものではない。

魔王ある限り、世界では今まさにこれと同じ光景が、悲劇が繰り返されている。

こうして命があるだけでも少年は幸運であつたと言えよう。

「じゃが、生きてさえいれば、で済ませるわけにもいかんな」

少年のその瞳に、怒りや悲しみよりも遥かに大きな憎悪の色を感じ取ったブライは、せめてその道を誤らぬようにと、静かに少年の硬く握られた手を取った。

そして数年後。

ブライに引き取られてからの少年は恵まれていたと言える。
新しい家族が、新しい友がいる。

年相応の明るさと活発さを取り戻した少年は、ブライに師事をして魔法使いとなるべく修行を始めていた。

「爺さん以上の魔法使いになる」

照れ臭そうにそう言った少年であったが、ブライは少年が自分に隠れて独自に体術や剣術の修行も行っている事に気付いていた。
未だ消えぬ魔王への憎悪が故に、少年が力を求めている事を知っていた。

強くなる事に異論はない。だからといって魔法も体術も幼い子供が片手間で習得できるような容易なものではない。

そこでブライは少年が肉体的な鍛錬に耐えられる身体に成長するまでは知識の習得を優先させる事にした。

幸いにもブライの知人にはその方面に長ける者がいる。古い友人の住むテラン王国へと向かわせる事とした。

テラン王国——ギルドメイン大陸にある、森と湖の国。

徹底した平和主義。時代の流れに逆らうかのように自然主義の思想を掲げ、そして衰退していった。

今では人口僅か五十人程となってしまったもはや名ばかりの小国である。

竜の神という諸国とは異なった信仰を持ち、名産になる物も無ければ、他国の人間があえて観光に訪れるような名所も無い。

定期的に訪れる商人以外は、外から来る者など滅多にいない。

まるで隠れ里のような雰囲気を持った寂れ行く静かな国。それがテラン王国であった。

しかし、テラン国王の知識と彼の蔵書は、この世界に並ぶものはないとされている。

変わり映えなく繰り返される穏やかな日々。それは戦う力を求める少年にとっては苦痛の日々であったが、それを打ち破ってまで無茶をする事もできなかった。

少年を迎え入れた祖母的な存在と妹分の圧力に屈したとも言つ。しかし、その変わり無き日々もテラン王より書庫の閲覧を許された日から一変する。

智に魅せられたのだ。

少年は日々の多くを書庫の中で過ごすようになった。

ほんの暇つぶしのつもりが、いつしかそれが目的となり。

食事も睡眠時間も滅茶苦茶になっていると、友人からの報を聞き、別の方向へ無茶を始めた息子にどうしたものかと頭を悩ませたブライであったが、その心配は杞憂に終わる事となる。

それは、ある一つの報が全世界を駆け巡ったためであった。

——勇者、魔王ハドラーを討つ。

少年の運命を変えた、七年にも及んだ戦乱の終結。

失われた復讐の機会、テランで得た新たな家族とも呼べる存在、月日の流れ、それらの全てが少年を変えていった。

成長した少年は、テラン王よりの推薦状を得て何を思ったのか僧侶となる修行を積むべくホルキア大陸にあるパプニカ王国へ旅立と

うとしていた。

戦乱後、魔王の支配下にあった多くの魔物が、邪悪な呪縛を解かれて人前から姿を消したとはいえ、元々地上に生息していた魔物までもが姿を消したわけではない。

魔王の脅威は失われても、生来の凶暴さを持つ魔物は人々の脅威として存在している。

故に魔王の存在が無くとも力を得る事は無駄にはならない。

少年からそれを聞かされた時、祖母ともいえるナバラはその事に首を傾げ、まだ幼い妹分のメルルは良く分っていないのかナバラの真似をして首を傾げていた。

「まあ、こんな時代だ。強くなって損は無いだろぅが……。魔法使いから僧侶、そしてパプニカ。アンタ賢者にでもなろぅってのかい？」

「賢者なんて大層なものになる気は無いし、なれないよ。ただ、さ。便利でしょ？」

「どっちも中途半端にならなきゃいいんだけどね。……アンタの人生だ、好きにやりな」

そうしてパプニカへの旅立ちを翌日に控えたある日の早朝。

復讐という目的を失ったとしても、習慣と化した鍛錬は早々止められるものではなく。

テランの森、その奥深くで日課の鍛錬を終えた少年がいつものように木の実や山菜を採って家へと帰ろぅとしたその時であった。

「ん？」

背後に感じる気配に少年はその足を止めた。
手に持った籠をそつと置くと、いつでも呪文を放てるように精神を集中させて油断なく振り向く。

「何者だ」

ただでさえ人の少ないテランである。知人の気配ぐらいは分るし、用があるなら向こうから声をかけて来るだろう。

「……出て来い。警告は二度までだ。三度もするつもりはない」

果たして、木々の間から二人の男女がゆっくりと姿を現した。

「そこで止まれ。おかしな動きは見せるな」

鎧を纏いその背に竜を模した剣を差した男と、その男に肩を支えられ目深なフードを被った女性であった。

男は背の剣に手を伸ばそうとしたが、隣の女性がその手に触れて何事かを呟くとその緊張を僅かに緩める。

互いに身を寄せ合ったその姿に、少年の脳裏にふと今は亡き両親の姿が思い浮かぶ。

途端に緊張が失せる。拍子抜けした、と言ってもいいのかもしれない。

「……向こうに空き家がある。とりあえず、休むぐらいは出来る」

構えを解き、そう言って地面に置いた籠を手を取った少年は、二人に背を向けて森の奥へと向かい歩きだした。

その行動眉をひそめた男だったが、傍らの女性が頷くのを見ると、剣に伸ばしたその手を戻し、女性と寄り添いながら少年の後に続き森の奥へと進んで行った。

互いに無言で歩く事しばらく。

そうして進んだ先。少し開けた森の中には確かに一軒の小さな小屋があつた。

「……すまない」

ここに至つてようやく警戒と緊張を解いたのか。

男の感謝の言葉に少年はひらひらと手を振る事で答えると、扉を開いて二人を小屋の中へと招き入れた。

相手が“ただの道に迷った旅人”であれば、家族の待つ家に連れて行くところであつたが、少年が二人をここへと案内したのは理由がある。

疲労の所為か少年の記憶にある姿よりもやつれて見えたが、女性の姿がとある人物に似ていたためだ。

直接言葉を交わした事はないが、ブライに連れられた先で何度か目にした事がある。

本人かどうかは分らないが、何にせよ訳有りであろう事は見てとれた。

明日にはパプニカへ、というこのタイミングで厄介事には関わりたく無かつたというのもある。

——ここはさ、一年以上前か。ベンガーナやアルキードでの暮らしに憧れて出て行った人の家。まあ、家というより小屋だけど

簡素なベッドであつたが、放浪の身であつた自分達には十分。
愛する妻を休ませると、緊張に満ちた長旅の疲れが一気に襲い掛
かつたのか。

男は椅子に深く腰掛けると、何をするでもなく、ただ呆然と天井
を見詰めていた。

戦うために生まれた男にとって、たかが追手如き何人向かつてこ
ような物の数では無かつたが“何かを守りながら”という行為がこ
れ程までに自身に疲労を強いていたとは思ひもしなかつた。

その事実が齒がゆくもあつたが、不思議と悪い気はしなかつた。

——好きに使ってくれって言つてたからさ、別にここに住んでも
文句は言われない

そうして暫く。

自分が眠っていた事に気付いた彼は、慌てて立ち上がると急ぎ辺
りを見回した。

追手がかかる可能性が常にある以上、迂闊に気を許すわけにはい
かなかつたのだ。

周囲の気配を探り、ベッドの上で穏やかに寝息を立てる妻の姿を
見て落ち着きを取り戻すと、「ああ、そうか」と呟き再び椅子に腰
を下ろした。

まどろみかける意識の中で、彼は先程出会つた少年の事を思い出
していた。

——おれも時々使っていたからね。シーツを置いていたのは偶々
だつただけだ

脇にあるテーブルを見れば、そこには中身の入った籠。干し肉や
干物などの食料、薬草らしき医療品が置かれていた。

——ここを出て少し行くと川がある。北に行くとテランダ。何も無いトコだけど人手位はある。まあ、爺ちゃん婆ちゃんばかりだけだな

いくら疲れがあつたとはいえ、人が訪れていた事に気付けなかったという事実は、戦場に生きた彼にとって看過出来る事ではなかったが。

——おれは明日にもこの国を離れる。パプニカに行くんだ。僧侶になるって言ったら婆さんには首を傾げられた

——多分もう会う事もないと思うから、気にしなくてもいい。お互い名乗らなくてもいいか

そう言つて出て行つたはずの少年の心遣いに、思わず笑みを浮かべてしまう。

結局、そのまま流されるようにお互い名乗ることも無かつたが、縁があればまた出会うことがあるのだろうか。

静かに眠る妻の元へ向かつた彼は、愛おしげにその頬に触れると、表情を穏やかなものに変えて呟いた。

「ここから始めよう、ソアラ。やがて生まれる子と共に、この地で穏やかに暮らそう」

少年がパプニカ王国へと赴き一年程が過ぎようとした頃、ナバラから一通の手紙が届いた。

それは、旅先の少年の身を案ずる当たり障りの無い内容だったが、

ナバラはその道では高名な占い師である。

そんな彼女がこの一年出した事の無い手紙を出した。

ブライとも暫く会っていないかった事を思い出し、これも良い機会かと、少年はパプニカ王の許しを得て故郷への帰路に就いた。

本来はアルキード王国への直行便に乗りたかったのだが、渡航規制が発せられたとの事で、隣国のベンガーナ行きの便に乗り少し遠回りする事になった。

ベンガーナ王国はアルキード王国と同じ半島の北側に位置する国であり、ナバラの待つテラン王国の隣国でもある。

ブライかナバラ、どちらから向かうかとの考えが纏まらぬまま、ベンガーナの港に着いた少年は、そこで気になる話を耳にする。

——魔物に王女を奪われたアルキード王が見事魔物を捕え、公開処刑を行う

少年の脳裏に浮かぶのは、あの森で出会った二人の姿。

馬鹿な、と少年は思った。

互いに寄り添う二人の姿は、一年経った今でもはつきりと思い出せる。

間違いであれば、少年はアルキード王国へと急いだ。

今更少年が行ったところで何ができるとも思えないが、ブライであれば、王の相談役でもあったブライであればきつと何とかしてくれると。

それは、一瞬の出来事であった。

駆ける少年の視界の先に、ようやくアルキードの城門が見えたその時——

眩い閃光が視界を焼く。

轟音が鼓膜を破る。

爆風が少年の身を包み込み、その身体を遙か上空へと吹き飛ばしていた。

大地に叩きつけられ、全身を襲う痛みによって意識を失う事もできず。

迫り来る死の予感と恐怖に泣き叫びそうになるが、動かぬ身体ではうめき声一つ上げる事すらできない。

（死にたくない死にたくない死にたくない嫌だ嫌だいやだいやだい……）

死を拒絶しながらも、暗転する意識に苦痛からの解放を感じる取る少年。

その甘い誘惑は甘美で抗いがたく。

それでも――抗った。

それは、何も分からず知らず、理不尽に死を迎える事への怒りであり、一瞬とはいえ苦痛からの解放を願い、死を受け入れようとした自分への怒り。

それは、意地。両親から託された命。自分の命の価値という目に見えぬモノに対しての誇りからくる意地。

少年の心は、ただひたすらに迫りくる死に抗い続けた。

どれほどの時間が過ぎたのか、それとも一瞬でしかなかったのか。

暗闇の中であがき続ける少年に、一筋の光が差し込む。

その光を掴もうと手を伸ばし――

いつしか少年の視界には、太陽に向けて伸ばされた自分の腕が映

っていた。

全身に感じる痛みは耐えられない程ではなく、ゆつくりと起き上った少年は、目も耳も、自分の五感が回復している事を確認すると、覚えたての回復呪文を唱えて傷を癒した。

あれはいったい何だったのか。

暫く身体の状態を確認していた少年であったが、風に吹かれて薄れ始めた砂塵の向こうから覗いた光景には、咄嗟に言葉を失った。

「地面が……アルキードが……大地が……消えた？」

その眩きの向こう。

先程まで人々の営みがあった、町が、城が、大地が。

その場所は、今は轟音と共に渦巻く巨大な入り江と化していた。

少年はただ呆然と、何が起こったのか理解できぬまま、その場でただ立ち尽くす事しかできなかった。

全てを無くしたあの幼き日のように。

ゆつくりと視線だけを動かす。

そこには

ナニかを抱え

飛び去る

何者かの

ひどく小さな背中が見えた

——アルキード王国消滅。

この報は瞬く間に世界中に広まったが、誰にもその原因を突き止める事はできず、様々な憶測だけが飛び交う事となる。

魔王の呪い、禁呪を行使して失敗した、新たな魔王が現れた。

復興の兆しも見え始め、人々がようやく以前の平和な生活を取り戻そうとした矢先の出来事であった。

この日、世界からアルキードと呼ばれた国が消えた。

その強大な暗黒の力によって、この地上を支配せんと企んだ魔王ハドラーが、勇者とその仲間達に倒されてから十数年。

未だ各地にはその傷跡を残しつつも、人々はようやく手にした平和な時間の中で、逞しく日々の生活を営んでいた。

世界四大陸の一つであり、地上界南西部を占めるラインリバー大陸。

その地にあるここロモス王国も、今では戦火から立ち直りかつての賑わいを取り戻しつつあった。

「だから、この際多少手強くてもいいからね？　もうちょっと金になるのではないの？」

そう言つてカウンターに詰め寄るのは、僧侶が纏う法衣をだらしなく着崩した青年である。

アバン達と別れ、一人口モスへと向かつた青年であつた。

腰まで伸ばされた長い黒髪は首の後ろで一つに束ねられ、腰には細身の剣を差している。

それなりの体格の良さも相まって、一見すると戦士のようにも見えるが、青年は自分を僧侶だと主張する。

洗礼を受け、僧侶の呪文を取得しているので決して嘘ではない。嘘ではないのだが、青年の人柄や戦い方を知る者は口を揃えてこう言つた。

——嘘くせえ、と。僧侶なめんな、と。

「あんなアウダー、ここはどこだ？　口モスだぞ？　そんなに金になるモンスターを探したけりゃあ、迷いの森か他の国にでも行け。オーザムとかリングアなんて稼ぎどころじゃねえか？」

「ふざけるのは髪型だけにしとけよオッサン。大陸を越えられるよな、そんな路銀があつたらね、誰が好き好んでオッサンの顔を見に来ますか」

青年の名はアウダー。

立ち寄つた街や村で、ちょっとした仕事をこなしながら、ふらふらと旅を続ける二十一歳の自称冒険者である。

魔王の脅威が去つた後でも、元々地上に生息していた魔物の中に

は、その生来の気質からか、魔王の呪縛とは関係なく人を襲う魔物がいる。

そういった中で、凶暴な魔物の退治や、平和になった事で再び現れ始めた山賊、海賊などの討伐、行商人の護衛や宝探しなどの荒事を生業とする冒険者という存在が、再び脚光を浴びるようになっていた。

魔王の引き起こした戦乱は、各国の軍事力を大きく削ぎ落とし、かつてのように自国の兵のみで国内の治安を守る事が困難になったのも一因である。

ここ“ルイーダの酒場”と同じく、魔王の戦乱の終結した後は、酒場や宿屋の多くはこうした冒険者への仕事の斡旋場としての役割を再開していた。

「なんだと！ この斬新な“アフロヘヤースタイル”を馬鹿にするのか！ これはベンガーナ王国で今最もナウいファッションなんだぞ！」

そう言つて、カウンターから身を乗り出し、顔を真っ赤にして唾を飛ばしながら力説する主人。

そのあまりの勢いに眉を顰めながら、「誰に聞いたの」と呆れながら尋ねたアウダーに返ってきたのは、ある意味で想定の内。

「黒縁の眼鏡をかけて、髪の毛がこうクルクルとした兄さんだ！」

「あゝ、うん。やっぱりね。何と言つか、ゴメン。何も言えない」

懐から取り出したハンカチで、飛ばされた唾を拭きながら、アウダーは相変わらずムチャクチャ言つたと、心当たりの人物を思い浮かべていた。

アバン・デ・ジュニアル三世。

自称勇者の家庭教師、という変人である。変態ではなく、変な人という意味での正しく変人。いや、これもまたある意味で変態かもしれないが。

アウダーとは、出会った先で何度か一緒に仕事をした仲ではあるが「どういう人物か？」と問われれば、そうとしか言いようが無い。確か、今は弟子のポップと一緒にパプニカへ渡ったと思っていたが。

あの後、結局船に乗れずにロモスに来ていたのだろうか。

「ま、可哀想なおっサンはおいといて。今日はルイーダちゃん居ないの？ 俺、あの娘がいるからここを利用してるのよ？ おっサン、いいから隠してないで出しなさい」

「お嬢はお城に定期報告。残念だが今日一日は戻らねえよ。つーか、おっサンを連呼するんじゃないねえ！」

まったく、どいつもこいつもルイーダ、ルイーダと言いやがって、とばやきながら不貞腐れる主人。

諸国に比べて、魔物の被害という意味では比較的安全な部類に入るロモスには、冒険者に向いた仕事というのはあまり多くはない。

つまりは平和であるのだが、それはソレ、これはコレ。

そんな中で、ここルイーダの酒場が繁盛しているのは、王国直轄の幹旋場である事と、客の大半が酒場の名前にもなっている女性、ルイーダ目当てなの大きい。

「なんだ、今日はハズレの日？ んじゃもういいや。おっサン、一番安い酒頂戴。もうね、今日は飲んで寝るよ。お兄さんは頑張った」

「大概失礼な奴だなお前は。頑張ったって、まだ何もしてねえだろ

うが」

昼間ッから何言ってやがる、とその言葉に苦笑しながらも、注文よりも少しだけ良い酒を出そうとする主人。

何だかんだ言ってはいるが、請けた仕事はちゃんとこなすし依頼人からの評判もなかなか良いアウダーは主人にとって手放し難い大事な客だった。

「オッサンに若さを吸い取られないように頑張ったんだよ？」

やっぱりどうでもいいか、こんな奴。

さりげなく記帳した代金を上げる主人。

酒のランクも落とす。

ちなみにツケである。

渡されたグラスを手にしたアウダーは、ぼんやりとグラスを眺めていると、そこに映った絵が気になり、背後の壁に張られた手配書に目を向けた。

「オッサン、何あの張り紙。新しい手配書？」

凶悪な魔物や犯罪者などが描かれた紙の貼られた看板に、一際目立つ物があった。

翼の生えたスライムが描かれたその紙は、日に焼けた跡もなく歪みも少ない事から、比較的新しい物だという事が分かる。

「ああ、ゴールデンメタルスライムだとき。デルムリン島って知ってるか？ どうやらあの怪物島に居るらしいんだよ。どこかの好事家が欲しがっているらしくてな。デルムリン島って事が嘘くさいんだがよ。一体誰が確かめたんだ、ってな。まあ、それでもだ、あそ

「こなら何が居てもおかしくないってのが微妙だよな」

「一、十、百……百万ゴールド!? ありえないでしょ、ナニコレ?
? この馬鹿野郎? コイツのイタズラじゃないの?」

あまりに馬鹿げた金額に、アウダーは思わず口にした酒を噴出し
そうになる。

ちなみに、その横に『いたずら注意』と書かれた小憎たらしい表
情の大ねずみの手配書もあったが、その金額は十ゴールドである。

「依頼主は確かだよ。ゴールドだってちゃんと払えるぐらいのな。
まあ、それだけ希少だって事なんだろう」

金を持っている奴は持つてるんだよ、そう言う主人には哀愁が漂
っていた。

「デルムリン島にねえ。あの近くまでだったら、この間行っただけど
ね。そんな珍しいスライムが居るなら、あの時漁師さん連中に無理
言っても上陸させてもらえばよかったか?」

先日、アウダーは近くの港町に住む漁師から、漁の邪魔をする海
の魔物“マーマン”を退治して欲しいとの依頼を受けて、デルムリ
ン島近くの沖合まで行っている。

件のマーマンであるが、仲間を引き連れて現れたので、とりあえ
ずリーダー格とおぼしき一匹に少し派手な一撃を与えると、涙目にな
ってさっさと逃げ出してしまった。

まるで弱い者いじめのようで、どうにも居た堪れなくなったアウ
ダーは、魔物に怯えて待っていた漁師達に、島に近づかなければ大
丈夫と報告した。

世界のどこかにあるという、心優しき魔物達の最後の楽園。

誰もが魔物を恐れ、信じようとはしないその噂の場所は、案外デルムリン島なのかもしれないと、その時の光景を思い出しながら、アウダーはグラスを口にした。

特に急ぎの予定もなかったアウダーは、そのまま主人と雑談を続けていた。

やれ、あの店のサービスはどうだの、道具屋の看板娘さんが最近化粧を覚えたのはどうだのと。

「馬っ鹿、オメ、あの尻が良いんだろうが、尻が」

「だからオッサンなんだよオッサンは。分かってないなオッサンは。尻とか胸とかはいいんだ。愛だよ愛。あとは性格と顔とプロポーション」

「だから！ オッサンを連呼すんじゃないやねえ！ 結局全部じゃないか！ ふざけんなこのヤロウ！！」

「ナメンナよ？ 巨乳だろうが貧乳だろうが問わないぜ？」

女性についてどうこう言う前に、自分達をなんとかしろとはこの時酒場にいた客達の共通の見解であったが誰も口にはしない。

いい感じにくだくだになり始めた二人はなおも止まらない。いつもであればこのあたりでルイーダの鉄拳が唸るのだが生憎不在。

やがて互いの生活態度に話が向かい、アウダーがかなりの数の魔物討伐を行っている事に、仮にも神に仕える僧侶様がそんな好戦的でないのか、と主人が問えば「それはそれ、これはこれ。今の世の中、人間生活していくにはお金は大事よ」と、これまた聖職者にあ

るまじき俗っぽい答えを返す。

（謝れ！ 世界中で一生懸命頑張っている僧侶たちに謝れ！！）

店内の客たちの心が一つになったが、馬鹿二人には届かない。

そりゃあそうだ、と馬鹿二人で笑いあっていると、

「あなた、デルムリン島に行った事があるのなら、私達を手伝ってくれる気はないかしら？」

背後からのどこか媚びるような艶を含んだその声に、アウダーが振り返った先には四人の男女の姿があった。

グラスを持った女僧侶と、小柄な老魔法使い、巨漢の戦士と目つき鋭い男である。

「船は手配できたんだが、案内人がいなくてね。できれば手伝ってもらえるとありがたい。もちろん報酬は払う」

眼つきの鋭い男の言葉に、盗み聞きとは趣味が悪いな、と思ったアウダーであったが、懐が寂しいのは事実。

報酬の部分を強調されたのは、金さえ積みめばと思われているようで、釈然としなかったが、

（案内するだけで構わないのなら暇つぶしにもなるか）

そう考えていると、興奮した様子の主人がアウダーに詰め寄りまくし立てるように話し出した。

「おい、ありゃあ、最近噂になっている勇者様御一行だぞ。凄いじ

やねえかアウダー。勇者様直々のご氏名を貰えるなんてよ！」

別に道案内が出来れば誰でも良かったんだろ、と思いはしたが、主人のアレなはしゃぎっぷりに黙っておく事に。

（それにしても、またえらく嫌な感じのする勇者様だことで）

勇者という言葉で、アウダーの脳裏に年甲斐もなくVサインをするあの変人さんの姿が浮かんだが、頭を振って掻き消す。

そうこうしている内に、主人と勇者様との間で、アウダーが御一行の案内をする事が決定してしまっていた。

「ほう、お前さんがあのアウダーか。なかなか評判の良い冒険者らしいの」

老魔法使いの人を値踏みするような目線に少し腹が立ったアウダーだが、俺は大人、俺は大人と自制する。

「勇者などと大それた者でもないが。さて、私の名前はでろりん。彼女はずるぼん、そこにいる魔法使いがまぞっほ。そして彼がへろへろだ」

その丁寧で礼儀正しい姿勢に胡散臭さも感じはしたが、「よろしく頼む」と、でろりんから差し出された右手をいつまでも放っておくわけにもいかず。

急ぎの仕事もないし主人の顔を立ててやるかと、アウダーはその手を取った。

「アウダーだ。ま、短い付き合いになるだろうけどな。よろしく頼むわ、勇者様」

怪物島の少年

降り注ぐ太陽の光を反射してきらきらと輝く穏やかな波間の上を飛沫をあげて進む一隻の帆船。

その甲板には、目前に迫ったデルムリン島を眺める四人の男女の姿があった。

「思っていたほど……大きくはないな」

手にした望遠鏡を片付けながら、それに近くに魔物はいないようだと告げるでろりん。

「キツヒツヒツ。あれだな、モンスターの生き残りがウジャウジャいるっていう島は……」

「またひと暴れしてやるかあっ！」

これからの事を想像し、嬉々としてそれに答えるまぞっほとへろへろ。

彼らからは、魔物の住む島に向かう事への緊張感といったものは感じられない。

「魔王が死んで、大人しくなったモンスターをいびり倒してりゃ、後は周りが勝手に勇者様と崇めてくれる」

こんなにオイシイ商売はないぜ、と顔を歪めて笑うでろりんに、まったくだと答えてまぞっほとへろへろは笑う。

「……ちよつと待ちなよ」

そうやって笑いあう三人を制止したのは、腕を組みながら彼らを睨み付けたずるぼんであった。

「アイツのことを忘れてるんじゃないでしょうね？ 嫌よ、ここまで来て計画をおじゃんにされるのは」

「む」

「まあ、そうなんじゃがな」

どうにか船は手配できたものの、魔物への恐怖からか、なかなかデルムリン島までの案内人が見つからない。

戦う力を持たない普通の人にとって、魔物の巣窟とまで言われるデルムリン島に行くなど正気の沙汰では無かったのだ。

これからどうしようかと、酒場で話し合っていたところ、偶然にも耳にした会話。それは彼らを惹き付けるには十分過ぎる内容であった。

『デルムリン島にねえ。あの近くまでだったら、この間行っただけだね』

そして主人と雑談を交わしている青年のだらしない姿に、金で釣れそうだと考えたでろりん達は、この訪れた幸運に感謝しながら青年——アウダーを利用する事に決めた。

あまり乗り気ではない様子だったが、都合のよい様に誤解をしてくれた主人のおかげで案内人として雇えた。そこまでは良かった。

問題は、まぞっほがお世辞で言った「評判の良い冒険者」が事実だった事。

準備があると言って一旦別れた後、でろりん達がアウダーについ

て調べてみれば出るわ出るわ。

この一ヶ月の間にこなした依頼は十八件。その全てが魔物の討伐という偏りっぷりに呆れもしたが、迷いの森のライオンヘッドを一人で仕留めたという話には、でろりん達も顔を引き攣らせるしかない。

正直、自分達より勇者らしくないか？　と思いはしたが、酒場で見た彼のあのだらしない姿、気の抜けた駄目っぷりを見せられては、誰も勇者などと呼びはしないだろう。

「外見や雰囲気ってのは大事だよな」

「まったくだな」

「雰囲気はだいじだ」

うんうん、と頷き合うでろりん達を「いい加減にしろ！」と、目尻をつり上げて睨み付けるずるぼん。

背筋を伸ばし直立の姿勢で固まる男達。

「そうじゃないだろ！　アイツに知られたら面倒だって言ってるんだよ！　今回の目的を忘れてんのかい？　横取りされたらどうするんだい！」

「まあまあ、そういきり立つでない。小皺が増えるぞ？」

肩を怒らせて興奮するずるぼんを宥める、ニヤリと口元を歪めてまぞっほが続ける。

「な」に、心配はいらんよ。さっきあいつが船室に降りよった時にな、こっ、ドア越しにラリホー（睡眠呪文）をかけてやったからな。

当分は目を覚まして。どれだけ強かろうと、油断しておればどうともなる」

それにワシのラリホーは天下一だからな、そう言っただけで胸を張りまぞつほは笑った。

「ふうん、ならいいんだけどさ」

自信たっぷりに言い切ったまぞつほに、それでも念を押す事は忘れない。小皺の件は後で問いたです。

「ならいいんだけどね。いいかい、忘れるんじゃないよ。あたし達の目的は——モンスター退治じゃないんだ」

「世界に一匹しかいないという幻の珍獣……」

「ゴールデンメタルスライム……か」

まぞつほの言葉に、口元を歪めるでろりん。

「でも、本当にいるのか？」

「いないなら島中皆殺しにして、いつも通り報酬を頂くだけよ」

笑みを浮かべて返すずるぼん。

悪党め、とそれを笑うでろりんであったが、船のものではない激しいしびきの音が聞こえ、慌てたように視線を海へと向けた。

そのただならぬ様子に、何事かとその視線を追うように海を見た三人の視界に、マーマンの背に乗って船へと近づく人影が映っていた。

「な、なんだい？ 新手の魔物かい！？」

「ま、まぞっほ。魔法だ魔法！！」

「お、おおっ。え、えくと、えくとなんじゃっけ！？」

途端にパニックを起こす三人。

でろりんも内心かなり慌てていたが、目の前でこれだけ慌てられるのを見ると、逆に落ち着けるもので。

「お前ら、本当にアドリブに弱いな」

自分の事は棚に上げ、向かって来る人影に目を凝らす。

「落ち着け、お前ら。あれは……子供か？」

「あゝっ！ や、やっぱり本物なあ！」

マーマンの背から甲板へと器用に飛び移り、四人の前に立ったのは黒髪の少年。

ぱっちりとした目、背中に背負った木刀と右頬にある十字の傷。まだあどけなさが残るものの、その印象はまるで田舎の腕白坊主である。

「ほ、本物の勇者さまですね！」

感激した様子で「すごいや！」と連呼して、きょろきょろとせわ

しなくでろりん達の様子を伺う少年。

思わず背中 of 剣に手をかけるでろりんであったが、それを制したのはずるぼんであった。

男達に何も言うなと目線で合図すると、今まで彼らには見せた事がない優しい表情を浮かべてずるぼんは少年に話しかけた。

「ぼうや、あなたは？」

「おれっ、ダイです！」

子供達にとって勇者とは共通のヒーローである。

夢にまで見た、憧れの存在である勇者と出会えたという緊張のため、直立の姿勢で答えるダイ。

デルムリン島で暮らし、そこに生きるモンスターは全て自分の友達なんだ、と嬉しそうにずるぼんの質問に答えるダイ。

二人から少し離れて様子をうかがっていたでろりん達は、あまりにも上手く進むこの状況にほくそ笑んでいた。

しかし――

（（女ってこえーな））

内心、そう思っていた事は彼らだけの秘密である。

背中に叩きつけられた様な衝撃、次いで鼻に感じた激痛、口中に広がる潮の味。

「ぶっ……うわっ、つぶ！？　ぶるああああアああハアアああ！！
はあ、は、あ、ハアハアは、は……は？」

ラリホーの効果が消えて目を覚ましたアウダーは、自分の置かれた状況に愕然としていた。
前を見れば去って行く船、後ろを見れば所々から煙を立ち昇らせているデルムリン島。
そして自分は海の中。

「……やられた……」

アウダーは最初から彼らを信用も信頼もしてはいなかった。
しかし、本物が偽者かはともかく、人々に顔の知れた勇者様御一行が、まさかこんな強硬手段を取るとは思いもしていなかった。
予想すらしなかった。というより予想できる訳がない。

（……本当に短い付き合いだった）

ご丁寧な事に、身包みを剥がされてはいなかったが、財布に道具袋が無い。

大事な荷物は宿に置いてあるので、財布の中身については一晩豪遊をかましたと思えば――思えるかこの野郎。

剣を残してくれているのはせめてもの優しさとするべきか、デルムリン島で一生過ごせとのメッセージと取るべきか。

「フツ……穏やかな日々は一流の戦士を牙の抜けた狼にしてしまうのだな」

格好良くきめてみたが、それに反応してくれる者は誰もいない。

「……三倍返したコノヤロウ」

それは基本だと復讐を決意したアウダーは、取り敢えずはと、デルムリン島へとゆつくりと泳ぎ始めた。

そうして泳ぎ続ける事しばらく。

どうにか海岸に上陸を果たしたアウダーは、砂浜に剣を放り出すと、頭を振って水気を飛ばし、長い髪を絞る。

いっそ髪を切るか、とも思ったが——止めた。

そして、濡れた上着を脱ぐと、八つ当たりをするかのように力強く絞り上げる。

本当はズボンとブーツも何とかしたいところだったが、ここは未知の怪物島。何があるか分からないと考えて諦めた。

パンツ一丁で戦う男、そんな重い十字架は背負いたくはなかったのだ。

実際、島の奥からはなんだか分からないが叫び声のようなものが聞こえている。

「出っ歯？ 居る居る？ 何だ？」

人の叫びにも聞こえるが、この島に人間が住んでいるなんて話は聞いたことが無い。

もったも、誰も確認したわけではないのでもないと言い切れない。

「人がいるならラッキーなんだけどな」

幸いにも日は高く、照りつける日差しはこのまま海に入りたいと思うほど。

しばらくすれば乾くだろうと、絞り上げて少しはマシになった上着を着直して、投げ捨てた剣を腰に差したアウダーは、島の奥へと足を向けた。

「ふう、これである程度の怪我をした者は……もうおらん？」

海岸から少し奥に入った場所である。

周囲に横たわる負傷した魔物——住人達の姿を見て、これも因果応報という奴なのかもしれない、と溜息を吐く一匹の年老いた魔物。

幾多の呪文を操る鬼面道士。名をプラスという。

デルムリン島に住む、争いを嫌い、平和を望んだ魔物達の纏め役であり、この島に流れ着いた人間の幼子を、魔王の呪縛から解き放たれて取り戻した善なる心をもって、厳しくも温かく育てた心優しい魔物である。

流れる汗を拭いながら、やれやれと近くの岩に腰を下ろす。

そうして一息ついたプラスであったが、その表情が晴れることはない。

「どうしたものかのう」

眉間を抑えながら、思い出すのは先程の大切な息子——ダイとのやりとりであった。

ダイが勇者様と紹介して連れて来た四人の人間達による、突然の

襲撃。

抵抗すれば良かったのであろうが、この島にすむ住人達は皆争い事を拒み集った者達。

自衛のためとはいえ、その牙や爪を振るう事を躊躇う者が多かった。

不幸中の幸いか、さしたる抵抗もしなかった事で命まで失う者はいなかったがその傷跡は深い。

彼らの目的はこの島の住人であり、ダイの親友であるゴールデンメタルスライム——ゴメの捕獲。

眼前の光景に怒り、彼らに果敢に立ち向かったダイもまた振り返り討ちにあい傷を負ってしまう。

騙され、島の皆を傷つけられ、大切な友達を連れ去られて、怒りと悲しみに震えるダイに、思わず与えてしまった力。

魔法の筒——中に生き物を一体だけ封じ込め、呪文を唱える事で中の生き物を出すことも、筒を向けた相手を閉じ込めることもできる魔法道具。マジックアイテム

良かれと思い渡したものの、それを人前で使ってしまった場合、普通の人間にはそんなダイの姿がどう映るのであろうか。

それが遙か昔に存在していた“魔物使い”として見えてしまうのであればまだいいが、ダイ自身が魔物として恐れられてしまうのではないか。

人間が、時には魔物すら恐れるほどの凶悪な一面を見せる場合がある事を、プラスは知っていたからだ。

しかし、現状であれ以外にダイの思いを適える事も、攫われたゴメを救う方法も無かったと、プラスは苦悩する。

耳を澄ませば、島のあちこちから、ダイの「イルイル！」と呪文を叫ぶ声が聞こえてくる。

比較的軽傷であった住人達を集めて、やはりあの偽者共の元へと

行くつもりなのだろうと察し、どうにもならない現実には歯噛みする。周りで傷を癒す住人達も、プラスと同じことを思っているのか、ダイの声が聞こえる度に、心配そうな様子でその方向へと顔を向けていた。

だから、気付かなかったのだろう。

自分達のすぐ近くに、招かれざる客がもう一人やって来ていた事を。

「あんな奴ら勇者でもなんでもないっ！　一緒に行つてぶちのめしてやろうぜ」

「がうがう！」

木々が生い茂る森の中。

そしてゴメちゃんを取り戻そう、と続けるダイの言葉に、了承を示すように前足を器用に挙げて答えるサーベルウルフ。

頬に絆創膏を貼り、所々に包帯を巻いた痛々しい姿であるが、ダイの瞳に諦めの色はない。

住人達もさすがに仲間がさらわれてしまった以上、このまま何もせず黙っている訳にもいかなかった。

「がうッ！」

「よおし、いくぞーっ。イルイルッ！」

ダイが手にした魔法の筒を向けて呪文を唱えると、サーベルウルフは淡い光に包まれて筒の中へと消えていく。

「頼むよ」

それを見届けると、五体満足であった島の住人のほぼ全てが協力をしてくれた事に、ダイは胸に温かいものを感じ、より一層決意を強くする。

「やっぱりじいちゃんはずっごいよなー。こんなアイテムを持っているなんて。でも、もっと早く教えてくれても……」

プラスにしてみれば、立派な魔法使いにしたいとの願いもむなしく、勇者を夢見て腕白盛りに育ってしまったダイの悪戯を警戒して話さなかっただけである。

そうして島中を周り終え、ゴメ救出の準備が整ったダイは、その事をプラスに知らせるべく駆けだそうとして――

「な、誰だ！ さっきの偽者の仲間かつ！？」

その時、木々の隙間から見えた見慣れぬ人影に声を上げた。

背中に差していた木刀を握り締めて、じつと人影へと注意を払う。

「誰だッ！ 出て来いっ！」

「あゝ、はいはい。そう怯えなさんなつての」

そう言っただけ現れたのは一人の青年。

その腰に差された剣に気が付くいたダイは、途端に偽者達に襲わ

れた時の事を思い出してしまい、その恐怖に木刀を握る手が震える。

（っ！ 怖がるな、怖がるな、怖がるな。ゴメちゃんを助けるんだ！ みんなのカタキを討つんだ！ 俺がみんなを守るんだ！）

友達や島の皆の事を思う。するとダイの身体から緊張が抜け、恐怖は去り、眼前の敵へと立ち向かう勇気が湧いてくる。

「これ以上、みんなを傷つけるなんて俺が許さない！ そうする気なら、俺がやつつけてやる！」

子供とは思えない鋭い踏み込みを見せ、上段に構えた木刀を目の前の青年へと真っ直ぐに振り降ろした。

しかし――

ダイが全力で放ったその一撃は

青年の掌へと吸い込まれるように

パンと乾いた音をたてて受け止められていた。

「う、あ……く、くっそー！ 放せ！」

その光景に、一瞬呆然としたダイだったが、慌てて青年の手から木刀を取り戻そうと躍起になって力を込める。

どれだけ力を込めてもびくともしない状態に、ダイは木刀以外のことから完全に注意を欠いていた。

その事に気が付いたのは、自分の頭に置かれた掌の感触を感じた時だった。

「ホイミ」

咄嗟に目をつぶってしまったが、全身を包み込む暖かい感覚に閉じた目を開く。

全身を包むやわらかな光。それが回復呪文の光である事を察して、ここでもうやくダイは落ち着いて青年の顔を見る事ができた。

少しだるそうな表情をした青年であったが、彼の浮かべる苦笑に、ダイへの敵意は感じられない。

木刀から手を離し、自分の身体を見れば怪我が治っている。

ひょっとして自分とはんでもない勘違いをしたのでは、と慌てて青年を見れば——つま先を押さえて蹲っていた。

タイミングが悪かった、としか言いようが無い。

青年——アウダーが落ち着いたかと、木刀を手放したのとダイが手放したのは全くの同時。

当然、重力に従って木刀は落下した。

アウダーの左足、その小指の上に。

海岸から現れたアウダーが、偽者共にしてやられたと経緯を話し、あの場にいた島の住人達の傷を回復呪文によって治療した後。

ブラスがいつまで経っても戻って来ないダイを心配し、何かあったのかとアウダーと共に探しに向かった先での出来事であった。

「あれは……痛そうじゃのう……」

物陰から二人の様子を見ていたブラスは、タンスの角に足の指をぶつけた時の事を思い出し、身が震える気分になった。

ブーツの上からとはいえ、あれは痛かろうと。

目の前ではひたすら謝罪を繰り返すダイ。

心配をかけまいと大丈夫だと平静を装いつつも、その目が泳ぎまわっていて明らかに不審過ぎるアウダー。

どうにも進まない状況に、プラスは溜息を吐き二人の前に姿を現す事にした。

暴力に訴え、他者が傷つく事も厭わない人間。

癒しと許しを与える事の出来る人間。

十人十色。人間とは、やはりよく分からない不思議な存在だ、と思いつつながら。

胎動

すまない、と頭を下げたアウダーを前にして、ダイはそれにどう答えたものかと悩んでいた。

目の前の青年が、親友であるゴメちゃんを攫いに來た偽勇者達の一味であった事には、確かに腹が立った。

しかし、偽物達を本物の勇者様と勘違いして島に招き入れたのはダイ自身である。

プラスが言うには、アウダーは怪我をしていた皆の治療を手伝ってくれたらしい。

事情を聴けば、元凶はあの偽者達だという事は分かる。

島の皆を助けてくれたアウダーを、今更非難するつもりはダイには無い。

（気にするなよ、は違う。騙された同士だね。……違う。うゝゝん

……なんて言えばいいんだ？）

ダイは考えるよりも先に動くタイプであったため、こうやって思い悩むような事は苦手だった。

だから——難しく考えるのは止めて、まずは思った事をそのまま口にする事に決めた。

「皆を助けてくれてありがとう」

「いや、ホントにすま……は？」

非難の一つや二つは覚悟していたアウダーは、そう言ってへへへと笑うダイの姿をまじまじと見た。

そうして暫く、呆然とした表情でダイを見ていたアウダーであったが、

「ははッ、ははははッ」

やがて声を上げて笑い始めた。

「……いや、悪いな。ホント、お前さ、きっと大物になるわ」

そう言って、ダイの頭をガシガシと撫でまわす。

「うわっ!?!? な、なにするんだよッ!?!」

子供扱いするな、と頬を膨らませるダイ。その反応を見て更に笑い出すアウダー。

そんな二人を見ながら、ブラスはダイの出した答えに満足そうに頷くと「では皆の所に行こうか」と、二人を連れて歩きだした。

デルムリン島の北部、その小さな岬に立つ三つの人影。

ダイとアウダー、そしてブラスである。

体に巻きつけたベルトにありつたけの魔法の筒を装備したダイは、その中の一本を取り出すと、天にかざして解放の呪文「デルパ!」を唱えた。

ポンという音と周囲に広がる眩い光。そこに現れたのは、翼を持った空飛ぶ魔物キメラであった。

「よしっ！ 頼むぞキメラ！」

「キュイイツッ！！」

「へー、また珍しい……魔法の筒か。実物なんて初めて見たぞ」

「こりゃ、待たんかダイッ！」

準備万端と意気込むダイに、ブラスは隠し持っていた金色に輝く
“特別な”魔法の筒を取り出そうとして——その手を止めた。

大事な事を確認していなかった事に、今になって気付いたからである。

「ダイ、確認をしておくが……。お前は、あの偽物達がどこに行ったのか、知っておるのか？」

「え？ じいちゃんが知ってるんじゃないの！？」

これに慌てたのはダイである。

だって何でも知ってるじゃないかと続けるダイに、もっと勉強をさせようと心に誓うブラス。

「……ハア……」

この微妙な雰囲気を破ったのは、この親子のやり取りを黙って見ていたアウダーだった。

「まあ、十中八九口モスだな。ブラス爺さん、“キメラの翼”を持つてないか？ キメラを前に言うのも何だが」

キメラの翼とは、雷に撃たれ死んだキメラが落とした翼を、特殊な秘術を用いて加工する事で作り出される非常に希少なアイテムである。

天に向けて放り投げ、翼が地に落ちるまでに行きたい場所をイメージすれば、その場所に一瞬で移動できるという効果を持つ。

非常に便利な道具だが、キメラの数が少なくなり、その入手の困難さ、成功や失敗に関わらず一度使えば失われるアイテムである事もあって、今では一部の王族や富豪だけが手にする高級品となっている。

「む、確か……一つだけなら有ったと思うんじゃが」

「そっか。だったら、悪いけどそれを使わせてくれないか？ 俺が使えばダイを連れてロモスに行ける。仮に、奴らがロモスに居なくてもアレだけ目立つ連中だ」

「え？ アウダーも手伝ってくれるの!？」

探し出すのは簡単だ、と肩をすくめて答えるアウダーに、一緒に行ってくれるんだ、と喜ぶダイ。

キメラを再び魔法の筒に戻すと「早く行こう!」とアウダーの手を取って急かし始めた。

「それはこちらとしてもありがたい話じゃが、アウダー殿は良いのですかな？ 争い事は避けられぬと思うのですが」

そう言つて「落ち着かんか」と、ブラスは手にした杖でダイの頭を小突く。

「それに、これはこの島の問題ですからな。遅かれ早かれ、いつか

はこのような事が起きるであろうとは思っておりまして」

「殿はいらないよ。義理と人情。俺がそうしたいと思ったからそうするだけ。ブラス爺さんが気にする事はない。それに、やられたらやり返すのが俺の主義」

三倍返しは基本だろ、と怪しく笑うアウダー。

「ハ、ハハハハ……。そ、それではキメラの翼を探して来るので少し待っていて下され」

ブラスは引き攣った笑みを返す事しかできなかった。

「行ってくるよ、じいちゃん！」

「くれぐれも気を付けてな。アウダー殿、ダイを頼みます」

興奮ぎみのダイとは違い、ブラスの表情に余裕は無い。

その内に、どれほどの葛藤があるのか。

アウダーには想像もつかない事だったが、分っている事は一つある。

「ゴメちゃんとやらと一緒にダイは無事に返すよ」

ひらひらと手を振って答えると、アウダーはキメラの翼を放り投げ――ロモスへ、と念じる。

眩い光がアウダーとダイを包み込み、光の玉と化した二人は瞬間に大空へと飛び去って行った。

「……ダイ！」

無茶だけはするのと、手にした杖を握りしめる。

そうして飛び去った二人を眺めていたプラスであったが――

「ん！？ し、しまったーっ！！ 忘れておったーっ！！」

慌てて自分の部屋に戻ると、そこにはダイに渡すつもりであった金色に輝く“特別な”魔法の筒が転がっていた。

「……ま、まあ。アウダー殿もおるんじゃないし……大丈夫……？」

第2話 胎動

「おおつ、勇者でろりんよ。よくぞ無事に戻ってまいった。そなたらの無事な姿を見て、このシナナ安堵したぞ」

ロモス王城――謁見の間。

ここロモス王国の国王であるシナナ王は、生来の温和な性格と気さくな雰囲気、寛大さ、その人柄と善政によって、国民に慕われて

いる。

少々間の抜けたところや、五十歳を越えてなお子供っぽい好奇心を隠そうとしないところが、側近からは苦言を呈されるところだが、かえって親しみのある王様だ、とは国民の意見である。

両脇に並ぶ家臣や兵士達を「楽にしてよい」と下がらせると、シナナは正面にかしずく四人の男女を見た。

こうして謁見の間であっても、目の前の勇者達の冒険譚を一刻も早く聞きたくてうずうずとしているのは誰の目にも明らか。

彼は、自分が国王という立場である事に不満は無く、誇りと熱意を持って善き国王足ろうとしている。

しかし、心の隅には目の前の冒険者達のように、気の向くまま自由に冒険をしたい、という思いがあるのも事実であった。

「さて、でろりんよ。このたびは魔物たちが巢食っているという魔の島、デルムリン島への冒険であったそうだが……」

玉座へと続く真つ赤な絨毯の上で、膝を付き頭を垂れるでろりん達。

思わず浮かぶ笑みを、必死に抑え込みながら、シナナの問いに答える。

「はっ、邪悪極まりない魔王の残党共が次から次へと襲い掛かってまいりましたが――」

そこで言葉を切り、ゆっくりと立ち上がったでろりんは両手を広げ、まるで吟遊詩人が伝説を謡う様に続ける。

「頼もしい仲間達と力を合わせ、正義のために戦う我々の前では、いかに凶悪な魔物であろうと恐れるものではありません！」

あまりにも芝居じみた行為であったが、この場では効果はてきめんであった。

周囲からの感嘆の声や、自分に向けられる尊敬の眼差しを感じるたびに、この後に見せるモノへの反応が楽しみで。

でろりんは、顔がニヤケそうになるのを必死で堪えて続ける。

「その戦いの中、一匹の珍しいモンスターを発見いたしました。殺さずに捕えてまいりましたので、王様に献上しようと思ひまして」

その言葉に合わせて、ずるばんは脇に置いていた小さな箱を、そつとでろりんに差し出す。

「そう、これが――」

その蓋を開くと共に、周囲には溢れんばかりの金色の輝きが広がった。

その神秘の光を見た人々の感動は、どれほどのものであったのか。シナナもまた、そのあまりにも美しい輝きに見惚れてしまい、最早溜息しか出てこない。

「伝説の、幻の珍獣と呼ばれるゴールデンメタルスライムですわ」

「まさしく……生きた宝石です」

「な、なんと！　なんと素晴らしい！！　見事じゃでろりん、そなたの望むままの褒美をとらせよう！！」

沸き上がる歓声。

「でろりんこそまさに真の勇者じゃ！」

感じた喜びのままに、四人を賞賛するシナナ王。
周囲の家臣や兵士達も、次々とでろりん達に拍手と賛辞を送る。
まさしくこの世の春を謳歌するでろりん達。

彼らの目の前には王の言葉に従い、次々と運ばれてくる宝箱や金貨の輝きが溢れている。

「今宵は宴を開き、勇者達の帰還を祝おう！　そして、その席上で余は真の勇者にのみ与えられるという覇者の冠を授けるであろう！」

——勇者様万歳！

シナナ王の宣言に沸きあがる人々。
たちまち興奮に包まれる城内。

しかし——

その歓声の中で、檻の中で捕らわれていた小さな魔物が流していた涙など、誰も気に留めることはなかった。

「……ピピピィ〜」

「うつわ〜、すっげー！　本当に一瞬だった。アウダー、あれが口モスなの！？　ふえ〜、人や建物があんなに！　あ、あれがお城か

「、でつかいな」

アウダーとダイが移動した先は、ロモス王国の城下町を見渡せる小高い丘の上であった。

昼時という事もあり賑わいを見せている城下町の光景に、おのほりさんよろしくはしゃいでしまうダイ。

「気持ち分かるが落ち着け」

「……大丈夫。分かってる」

一転して、ダイは思い詰めたような表情となってしまう。

「氣負い過ぎだ」

ダイの頭をぽんぽんと叩き「観光はお友達を助けた後にな」と、城下へと歩き出すアウダー！

「……うん！」

力強く頷いたダイは、先に行くアウダーを追って駆け出した。

（待っててよゴメちゃん、俺が必ず助けるから！）

ルイーダの酒場。

酒場と名乗っているように、基本的には夜間の営業がメインであ

る。

昼間は掃除や料理の仕込みなどで忙しく、片手間で冒険者への仕事の斡旋を行っていた程度である。

せいぜいが、常連相手に軽い食事を出すぐらいであった。

しかし、今日は特別の日。

凶悪な魔物を退治したという勇者の活躍は、城内から瞬く間に城下へと広がり、一気に国を挙げてのお祭りムードへ。

良く言えば、王家と国民の強い一体感、悪く言うならノリが良いという事が。

シナナ王もそうであるが、国民性とても言おうか、この国の人々は他国に比べておおらかな面が目立ち、お祭り好きという一面が強かった。

兎にも角にも、そんな活気に湧くこのチャンスを逃してなるものか。

そこで、主人は酒場の開店時間を大幅に早めてみた。その結果――

「オヤジー、こっちにエール3つ！」

「おい、ルイーダちゃん、こっちだこっち」

「何だよ何だよ、こっちが先だろ」

「嬢ちゃん嫁に来てくれー!!」

「うるさい！ 落ち着けこの酔っ払い！」

「ぎゃははは。何だ、また怒られてるのがゴメス！」

昼食時で賑わう店内には慌ただしく動き回る姪の姿。その予想以上に活気づいた店内の様子に、俺って商才があるんじゃないかとニヤケる主人。

「勇者様ありがとう」

天に向かって感謝を述べる。

「勇者様はいいんだけどさ。アウダーはどうしたのかな？」

「んあ？ ああ、そうだなあ」

料理を取りに来たルイーダの言葉に思い返す。

勇者様勇者様と言われてはいるが、その話の中に一緒に行っていたはずのアウダーが全く出てこない。

「ただの案内人が英雄譚に語られる事が無いのは仕方が無いんじゃないかねえか？」

とは言え、依頼には違いないのだから、結果報告のために顔ぐらいは見せに来てもおかしくはないのだが。

さて、と主人は顎を撫でる。

「元々、あいつは旅人だからな。あれだろ？ 路銀が都合出来て、そのまま旅にでも出たって事も考えられるわな」

「そうかなあ？ それならそれでいいんだけどさ。でも、一言ぐらいあってもいいと思わない？」

薄情な奴め、と。どこか憮然とした表情のルイーダに、本人そっ

ちのけで勝手に話を決めた事を叱られた記憶が蘇り、主人は慌てて話を変える事にした。

「ほら、早く持つて行け。お客さんが待つてるんだからな」

「あ、うん。って、こらそこ！ 酔っ払い！ お皿を投げるな！！」

高いんだぞ、と慌しく駆け出すルイーダ。

「……まあ、アウダーなら何があっても大丈夫だろ」

そう思う事にして主人は次の料理に取り掛かった。

「駄目だな、他の店に行こう」

宿に戻り、置いていた荷物から昼食代を確保したアウダーは「とりあえず飯を食っとくか」と、ダイを連れて馴染みと化したルイーダの酒場へと向かった。

ダイとしては、一刻も早くゴメを助けに行きたかったので、そんな暇は、と文句を言おうとしたが、運悪く腹の虫が鳴ってしまい。

慌ててアウダーを見れば、ニヤニヤと笑っている。

なんて性格の悪い大人だ、と思ったが空腹には勝てず。

そうして渋々ついに行った店の前で「ちょっと待つてろ」と、入り口の陰から不審者よろしくこそそと店内を伺っていたアウダーの発した言葉がこれだった。

普段は暇なはずの時間帯なのに、どうにも慌しく忙しそうで。

こんな時に店内に入ろうものならあの主人の事、きっと自分を従業員のように扱き使うハズだとアウダーは回れ右を選択する。

「右に回りますか、はい、だ」

「えゝ、なんでだよ？ いいじゃん、いい匂いもしてるよ！」

漂う料理の匂いに、鼻をひくひくとさせながら文句を言い出すダイ。

何だかんだ言いながらも育ち盛りである。食べる気満々であった。

「……おいコラ」

お前はさっき何と言った、と突っ込みを入れようかと思ったが、大人気ないと考えて、アウダーは話を逸らす事にした。

「ゲフンゲフン。いや、どうにも満席みたいだ。この通りをもう少し先に行けば、別の店がある。そこにしよう。そうしよう」

「あ、待ってよ！」

（しかし、何だってんだか。この感じは）

何やら非常に浮ついた雰囲気の下。

そこかしこで交わされる人々の会話に耳を傾ければお祭りだの勇者様だの。

「……面倒な事になりそうだ」

そう呟いたアウダーの言葉は「早く行こう!」と急かすダイには聞こえていなかった。

ロモス王国の南東部には、巨大な森がある。

過去、何人もの人間がこの森へと入り、無事に森を抜けた者、戻ってきた者は数少ない。

日の光を遮るかのように並び立つ無数の大樹。

昼間であっても光の差さないその地に、鬱蒼と覆い茂る草木は人々に不安と恐怖を与え、そこに棲む無数の魔物の存在もあって、いつしか人々はこの森を“迷いの森”と呼ぶようになった。

今では近隣の村に住む住民達や、一部の人間を除いて、進んでこの場所へ近づこうとする者はいない。

この森に棲む魔物に対して幾度か討伐隊を求める声も上がったが、そこに棲む魔物が森を出て人々を襲う事は稀であったため、王家はその対応を監視の強化と国民への注意を促す程度に留めていた。

魔王ハドラーの起こした戦乱により多くの兵の命が失われた事で、新たに再編された兵団には若年の者が目立ち、討伐隊を組めるほどの余裕も無ければ、近隣の村々へ配備する兵力も足りなかった。これはロモス以外の国にも言える事であったが、それが実情であった。

そんな迷いの森の奥深くに、人知れず造られた洞窟があった。

咆哮を上げる巨大な魔物の顔を思わせる入り口を構えた不気味な洞窟である。

「ふん、あのような奴が“獣王”を名乗るだと……」

その奥深く、暗闇の中で蠢く巨大な影。

影は洞窟の外へと向かい、ゆっくりと動き出す。

そして、差し込む僅かな光にその影の姿が露になった。

丸太のような巨大な四肢を持った牛頭の、伝説にあるミノタウロスを思わせる巨漢の魔物。

全身を覆うプレーメルが、日の光を反射して不気味に輝いていた。

右手に身の丈はある巨大な戦斧を持ち、左手には一つ目の魔物“悪魔の目玉”が握られている。

「見くびりおって……百獣魔団を統べるのはこの俺様こそが、百獣将軍ザングレイこそ——ふさわしい!!」

苛立ちと共に、悪魔の目玉を地面に叩きつけ、手にした巨大な戦斧を力任せに振るう。

その巨腕によって巻き起こされた風圧に、周辺の木々が次々と碎けへし折れていく。

その光景に満足したのか、落ち着きを取り戻したザングレイは、手にした戦斧を足元に転がる瀕死の悪魔の目玉に叩きつけると止めを刺す。

「手緩いのだ。人間などに何を恐れるものがあるか。時間など与えずにさっさと叩き潰してしまえばいい」

これから始まる事を想像し、愉悦に歪められたその表情は——邪悪。

「手柄だ。手柄さえ立ててしまえば誰も文句は言わん」

ザングレイが視線を向けた先、その方向には活気に賑わうロモス城があった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8664y/>

ドラゴンクエスト～勇者達の物語～

2011年11月26日01時58分発行